

## “One for all, all for one.”

成城大学教授 村本 孜

見過ごしてはいるが気になる表現や言葉がある。マーシャルの“Cool head but warm heart.”やシュマッハーの“Small is beautiful.”などがそれであるが、とりわけ“One for all, all for one.”（一人は万人のために、万人は一人のために）は、生命保険や協同組織の研究には常套句として登場し、その言葉の由来などが長年気になっている。

最近の生命保険の理論展開では、相互主義の意義は認めるものの、必要十分条件ではないとの考え方もある。他方、生保会社の組織形態をめぐる議論をみると、余計に“One for all, all for one.”について関心を抱かせる。

現に、ある相互組織の生保会社は、経営基本理念の冒頭に「共存共栄、相互扶助の精神に基づく生命保険事業」と掲げ、相互扶助を謳っている。また、ある株式組織の生保会社の経営理念には「愛と信頼に基づく相互扶助の精神こそ、生命保険の本質である」とある。

このように生保に「一人は万人のため・・・」は必須と思われるが、学界的にはドイツの保険学者マーネスが1922年の書物で使用したことが初めとされている。一方、この言葉はラグビーで広く普及し、ラグビー協会は、フェアプレー、ノーサイドと並び、この言葉を行動規範としている。

生保以外で古くから用いられたことについては、デュマの小説『三銃士』（1844年）にあることがよく知られている。フランス語の“tous pour un, un pour tous.”で、「万人は一人のために、一人は万人のために」という表現である。この語句が2回出てくるので、デュマ起源説となっているが、邦訳は「四人一体」（生島訳）、「四人は一つ、切っても切れぬ」（竹村訳）などで「万人・・・」の語はなく、邦訳を見る限りデュマ起源説に確信がない論もある。ところが、デュマは『三銃士』に先立つ10年前の『スイス

紀行記』（1833年）の中でスイスの国としてのモットーが“un pour tout, tout pour un.”であることを書いている。デュマ説は『三銃士』ではなく、『スイス紀行記』に求める方が妥当かもしれない。スイスでは、現在、この言葉が事実上国の標語になっている。

同じ頃、フランスの社会主義思想家のカベールは、政治亡命していたイギリスから恩赦で帰国した時に、『イカリア旅行記』というベストセラーを書き、その1845年の版で“tour pour chacun, chacun pour tout.”（chacunは英語のeach）をその本のフロントページに掲げている。同じページに幾つかの標語があり、それがマルクスの共産主義思想に影響を与えたというのが学界の通説である。イカリアというのは一種の共産主義的なユートピアで、実際にアメリカの南部を中心にフランスから入植した人々により、数箇所でコロニーが作られた。現在でも、カリフォルニアにイカリアと名付けられたワインが残っている。

さらに、同時代のピアニストのリストが駆落ち先のスイスで1837年頃に作曲したピアノ曲集『旅人のアルバム』の中にある「ウイリアムテルのチャペル」の楽譜の冒頭に曲想としてドイツ語で同じ意味の“Einer für Alle, Alle für Einen.”を掲げたことである。この曲の修正版が1855年の『巡礼の年：第1年—スイス』の最初の曲として収録されており、その楽譜の表紙の標題の下に同じ語句がある。また、この語句はドイツの行政家で農村部での信用組合を作ったライファイゼンがその著『信用組合論』の第2版（1872年）で用い、協同の精神として協同組合関係の根幹をなしている。

このように、“One for all, all for one.”は、特定の論者によるというよりも、かなり古くからヨーロッパ、とくにスイスで人口に膾炙していたというのが正しいといえよう。